

## 〔二〕 ② 特別教育活動に関する研究

天 野 菊三郎 原 田 秀 雄 加 藤 剛  
高 橋 恵 亮 北 田 明 子 鈴 木 孝

### I 本校の臨海学校の実態（成果）とその問題点

天 野 菊三郎 原 田 秀 雄 加 藤 剛  
高 橋 恵 亮 北 田 町 子

#### ま え が き

本校の臨海学校の歴史は学校創立以来中学生を対象に必須学校行事として行なってきた。

- 1 期 昭和24年～26年＝三河大塚海岸  
2 期 昭和26年～37年＝浜名湖新居弁天  
3 期 昭和38年～現在＝知多郡野間海岸

宿舍野間館（季節旅館）4泊5日，現在は中  
1のみの必須行事である。臨海学校の目標は

1. 健康教育・安全教育の立場より夏期一定期間海浜生活を行ない水泳技術の修得（全員500m完泳）と健康の増進をはかる。
2. 集団生活内の生活指導により規律・協同・忍耐の精神を養う。
3. 健全なレクリエーション活動の指導により，明るいレクリエーションの修得と，クラス，生活班グループの友愛・親和を高める。

以下3つの目標についての現況（成果）とその問題点を述べる。

#### 〔1〕 水泳技術の修得状況

（43年～47年）

1. 練習期間 全員 500 m完泳を目標にしプールにおける準備訓練（水慣れと能力検定を中心に）3日間（午前中2時間30分）と臨海学校4泊5日（午前4回・8時間と午後4回・10時間）で，水泳初心者の時期は練習効果の持続の上から継続練習が必要であり，その面からもこの行事は効果的である。反面疲労の累積を考え，その回復の為の方策，即ち生活指導を十分に配慮する必要があり，この点は〔2〕の生活指導の項で述べる。

2. 実施期日 8月第一週の月→金（4泊5日）。設定の理由は宿舍と高校の林間行事・対金大付高定期戦の関係があげられるが，天候の条件も考慮している。5ヶ年間の天候をもとにした水泳条件を表にすると

表1のごとくなる。海浜における水泳条件は気温・水温・風・波・潮流・雨が考えられるが，特に初心者にとり水温・気温・波は身体・精神のリラックスのためには心須条件で，如何によい指導法を行なっても自然条件が不可なれば効果が少なくなる。主観的判断が主になるが，この5ヶ年間の状況は一応条件の安定した期間といえる結果を示している。

（表 1）

	期 日	第1日	第2日	第3日	第4日	第5日
昭43年	8月5～9	○	△小雨	○	◎	◎
44年	4～8	△台風	○	◎	○	△波高
45年	3～7	◎	○	◎	◎	△小雨
46年	2～6	◎	○	○	△×雨	◎
47年	7月31～4	◎	○	◎	○	◎

註◎ 晴 気温30°以上風・波なし。

○ 晴 以上条件の中，不十分なものがあるが，練習に支障なし

△ 曇 条件不十分なるも練習を行なったもの

× 条件不良にて練習できないもの。

3. 指導組織 性別・能力別班編成とし班別指導の徹底を旨として指導者1人の分担は7バディー（14人）以下を原則とし特に泳げない者を重点的に指導するために指導スタッフを強化している。指導スタッフは本校教官・水泳講師1名の他卒業生（体育系学部進学者・卒業生）の援助奉仕をうけている。水泳指導の原則は一に監督・二に指導であるが監督監視のみで指導がなければ生徒はいつまでも泳力の向上は得られず常に危険にさらされており，安全教育の面からも一考を要す。スタッフを揃え指導に徹し，早く泳力をつける指導に専念する事こそ安全教育の道である。この為には組織管理に検討を加え各班複数指導スタッフを編成し監視に穴のない様配慮してある。臨海は単なる水遊びではない，この主旨は生徒にも事前に徹底し，常

(表 2)

年 度	生徒数		計	教 官		講師	指 導 員		養護	計
	男	女		男	女		男	女		
昭和43年	49	37	86	6	1	1	5	3	1	17
44年	42	43	85	6	2	1	4	2	1	16
45年	46	39	85	7	1	1	7	2	1	19
46年	46	40	86	8	1	1	5	3	1	19
47年	46	35	81	7	1	1	5	2	1	17

に指導者の見える範囲で指導者を中心に練習し、事故の早期発見の対策としてはバディーシステムの励行を実施している。表 2 は生徒数と指導者の関係を示したものである。

指導組織例 昭和47年度

班別	級別	指導スタッフ		註
第一班	3級男	2	20	3
	4級男			
第二班	3級女	4	11	2
	4級女			
第三班	5級男	6	12	2
	女			
第四班	6級男	11	2	
第五班	6級女	13	3	
第六班	7級男	3	8	2
	女			

4. 水泳級別基準

- 7級 25mに達せざるもの
- 6級 25m以上
- 5級 100m以上
- 4級 500m以上
- 3級 標準泳法略修得クロール・バック・平泳・横泳・潜水(20m, 女15m)・逆跳込
- 2級 3級泳法その他・立泳・バタフライ・横体泳法・各種
- 1級 救助法・指導法(現在未実施)

具体的到達基準を決定し、生徒の自発的活動意欲を高めるとともに指導管理に便ならしめるために実施している。生徒皆泳500mを第一の目標に、更に能力あるものには3級以上の各種目を指導するが、競泳的速さの指導は9月以後のプール指導によるものとして、泳法の基本の修得に努力目標を置いている。各階級毎に水泳帽に標示の線を入れるとともに、校長名の修了証を与えているが、これは生徒の意欲向上と水泳管理面に非常に役立っている。

(表 3) 進 級 成 果 表

年度	性別	生徒数	プ ー ル 初					プ ー ル 終					臨 海 終					備考				
			計	ナシ	7級	6級	5級	4級	計	7	6	5	4	3	計	7	6		5	4	3	2
昭和43年	男	49	1	11	9	15	13	49	4	10	7	28		49			5	21	20	3	49	水泳禁止者 女 1
	女	37	5	13	10	1	8	37	7	16	5	9		37			6	23	5	2	36	
昭和44年	男	42		9	14	11	8	42	6	12	5	19		42			6	21	12	3	42	
	女	43		12	17	11	3	43	10	18	6	6	3	43			4	28	4	7	43	
昭和45年	男	46	1	3	15	18	9	46	2	11	8	22	3	46		2	1	22	17	4	46	欠 席 女 1
	女	39	2	5	21	4	7	39		4	13	13	9	39		3	2	21	8	4	38	
昭和46年	男	46	1	1	21	13	10	46	1	4	19	19	3	46		1	1	28	12	3	45	欠 席 男女 2
	女	40	5	4	14	14	3	40	1	11	7	17	2	38		5	3	17	7	4	36	
昭和47年	男	46	4	5	21	16		46	9	11	6	18	2	46	2	4	2	19	14	5	46	7 級 見学者
	女	35	2	10	16	7	35	5	13	6	7	4	35		3	5	14	6	7	35		
計		423	21	73	158	110	61	423	45	110	82	158	26	421	2	18	35	214	105	42	416	
%			5	19	37	26	13	100	10	26	20	38	6	100	0.5	4	8	51.5	10	26	100	

5. 泳力修得状況（成果） 表 3

本校生徒は名古屋市内および通学時間一時間以内の小学校出身者（48年より市内のみ）で大部分は名古屋市内出身者である。

(1) 完泳目標達成度について

目標達成度は表3の5ヶ年間の%で検討すると、4級以上の合計を基に判定すれば5ヶ年、平均87.5%となり、ほぼ目標達成したものと考えてよいのではないが、100%の達成は女子の生理による見学等の理由で仲々困難なものであるが無欠課のもの集計は当然90%以上になっている。年度別に見れば、43年=87%、44年=88%、45年=89.4%、46年=85%、47年=80.1%となり、45年度をピークにやや下降を辿っているのが心配である。その原因は下位群の数が問題となる。45年と47年を比較すると、7級以下の数が45年=11、47年=21となり劣っていることがわかる。その理由の一つと考えられるのは小学校における指導・管理に問題があるのではないかと。即ちプールの施設の普及度

は進んでいるが実際の利用指導が十分に行なわれているか、最近教官の勤務体制の変動により夏期休暇中のプールの開放の制限により生徒の利用が十分出来ない所が多いときく。折角の施設も宝のもちぐされとなり設備をつくれれば事足りりとする気持ちがあるのではないかと。また上位群のものもスイミングクラブへの参加により泳力を高めたものが多く学校体育の限界の問題として考えさせられるものがある。

(2) 各級別進級状況 表 4

プール当初テスト→臨海終了時の成績により各級の者がどれ位進級し得たかを集計したもの（5年間の集計）が表4である。

前述の通り4級迄は距離を泳力としており、3級以上は泳法の修得を主としているので、プール当初の上級者の方が進級度数が少ない。臨海における距離のテストは50m間隔の往復制を用いている。プールと異なり、波・潮流等が初心者には強く影響し困難度はプールよりも高い。男女2階級進級者が半数を占め、次に

表 4

		男					女				
進級度数		0	1	2	3	計	0	1	2	3	計
プ ー ル 初 の 級	7 級	2	7	12	12	33	1	8	12	25	46
	6		4	69	8	81	4	7	57	12	80
	5		25	43	6	74	1	16	13	10	40
	4	4	24	12		40	2	9	12		23
	計	6	60	136	26	228	8	40	94	47	189
	%	2.6	26.4	59.4	11.6	100	4.2	21.1	49.8	24.9	100

男子は1階級、女子は3階級が多いことがわかる。進級0は女子に若干多いが、生理等の見学によるものが多い。7級の者が全体に占める率は男子228人中33人で14.4%、女子189人中46人24.3%で、女子の方が当初は泳げない者が多い。7級の者が到達目標の4級=500mに達するためには3階級の進級せねばならぬが、その到達度は男子33人中12人の36.3%、女子46人中25人の54.4%となり、女子が高い。全般的に下級の者の進級度は高いのは距離を基準にしており呼吸法・脚の基本動作を修得すれば単一の動作の経続である故進歩は著るしい。この資料は練習当初の各級の者に対する指導において努力をすればどこまで進級できるかの根拠となり、自信を持って水泳に対する心構えとなっている。

(3) 進級面よりみたるプール指導と臨海指導の比較

表 5

進級度	0	1	2	3	計
P	201	197	19		417
臨 海	52	200	146	19	417

両者の間には練習時間の差7時間30分：18時間、指導スタッフの差3：15と水慣れ度の差等があり単純対比の意味はないが、指導の立場から一応のめどとして参考にしている。

以上水泳技術面よりの結果の考察をしたが、結論は一応の成果をあげているものとする。今後の問題点と考えられるものをあげると、公害による海水の汚染の問題がある。野間は伊勢湾に面し名古屋臨海工業地帯の影響をうけ毎年汚染度は増しているのが現状で、一応海水浴場としての汚染度はAランクにあり心配は

ないが、今後はどうなるか問題である。若狭湾方面の調査をしているが、経費面、宿舍等の点において幾多の問題を持っている。

## 〔2〕 集団生活用の生活指導について

生徒の大部分は家庭を離れて集団生活をする経験は小学校時の修学旅行（1泊程度）と一部の生徒の臨海学校の経験で4泊5日の経験は初めてである。入学以来4ヶ月新しい中学生活で学校を離れての初めての生活経験であり、2年生以後の校外集団生活の基礎的訓練の場であり、極めて重要なものである。特に水泳訓練は疲労度の高いものであり、疲労回復の面からも規律・協同の生活が必要となってくる。

生活単位を各クラス男女別10名単位で、男女各4単位の編成班とする。班員の編成は無作為に担任が決定する場合が多く、班長は班員の互選により選出し班長は生活班の中心となり、教官側の指示の伝達・施行の責任を持ち、班行動の中核とし、レクリエーション活動および班対抗競技等の行事のリーダーシップをとる。

規律については朝夕の点呼ならびに礼法を厳正にし躰教育を徹底して実施している。臨海後の家庭生活に生徒の行動に変化があり、父兄より共感を得ている。

協同については食事・寝具の準備後仕末、清掃、整頓等すべて生活班単位に行動し、その責任を追求する自分の事は後に、班の仕事は先にながモットーである。セルフサービスを徹底し、自分達のことは自分でやる。このため女中サンの仕事がなくなり、苦情がでる位である。

忍耐については衣食住全般に簡素化をはかり、水泳以外の陸上生活は運動服で生活し、甘味品の携行制限（500円迄）小使い500円（土産物・解散後の交通費）としている。食事はカロリーは十分にあるが、出されたものは好き嫌いなく全部食べなければ班全体が御馳走様にならない。このため偏食の是正に役立っている。

問題点として特別なないが、宿舍が男女別に階上、階下に別けた関係上、男子の室がややせまく思われる。男女共大部屋で、管理上都合よく、特に階上女子の室で全員揃ってレクリエーション活動できるのが良い。

日課は次のとおり。（平日）

6.00	起床, 点呼, 朝会, 体操, 清掃
7.00	朝食
7.30~9.20	学習
9.30~11.30	水泳
12.00	昼食
12.40~2.00	午睡
2.20~5.00	水泳

5.10~6.00	入浴, 夕食
6.30~8.50	レクリエーション
9.00	点呼, 就寝準備
10.00	消灯

特別行事として野間灯台見学（3日目朝, 点呼後）野間大坊見学（5日目朝）を行なっている。

## 〔3〕 レクリエーション活動

本校の臨海学校におけるレクリエーション活動は、水泳訓練の時間、食事、睡眠等の生活時間以外の空き時間の単なる気ばらし、ひまつぶしにとどまらず、臨海学校の生活を楽しみながら、生徒に自主的、創造的な人間へ、集団の中で協力し合える人間へ成長する機会を与えることを目標にしている。

しかし教師とはかく教育的な目標を先立たせて、レクリエーション活動をとりあげようとする傾向があるが、教育的目標があまり表面にでると楽しかるべきレクリエーションが楽しくなくなってしまう。適切なレクリエーションをとりあげ、適切な指導をすれば、レクリエーション自体の中にその目的を果すエネルギーは存在するはずである。したがってこのような教師の目的意識過剰には特に留意している。

本校の臨海学校では前述の目標達成のために、レクリエーションは単に夜の時間にとどまらず、集団生活自体がレクリエーションな雰囲気で行なわれるように心掛けている。起床は「ユパイディ」の歌のテープによって行なわれる。食事の時は、食前には「ごはんのうち」食後には「みんなであらえば」を全員で歌う。就寝の合図は全館に「おやすみなさい」の曲がテープで流されて、静かに臨海学校の一日が終ることになっている。このように生活の匂切りに音楽を用いると、雰囲気全体が和やかになると共に、無意識のうちに連体感の育成に役立つようである。

夕食後のレクリエーションは、次のような点に留意している。レクリエーションは本来、自らの興味、関心に基いて自主的にする活動である。しかし現代の生徒は遊びを知らない。その反面生徒の遊びは受動的であり、マスコミ、レジャー産業資本の意志のままに操られたものが多い。このような生徒を、そのままにしておけばレクリエーションは活潑に行なわれないし、また教育的な意味もなくなってしまう。それで本校ではまづ教師の指導のもとにレクリエーションを体験させ、生徒にその体験を通して、「レクリエーション」「遊び」の本当の楽しさを知らせるように心掛けている。また毎晩変化をもたせるように努めている。本年の実施状況は次の通りである。

### 1. 第一夜 ゲームとソングの夕

場所 屋内

体型 全員一重円

プログラム

- (1) 拍手ゲーム
- (2) ハローソング
- (3) もしもしかめよ（シンギングゲーム）
- (4) 海の一日（歌）
- (5) ユパイディ（歌）
- (6) ごはんの歌
- (7) たことたぬき（ゲーム）
- (8) 仮面ライダーの歌
- (9) フリックナーデスモー（歌）
- (10) から傘（ゲーム）
- (11) みんなでうたえば（歌）
- (12) おやすみなさい（歌）

第一夜の目標は、1つには生徒にレクリエーションの楽しさを味わわせることであり、第2には、生活で使う歌を指導することである。プログラムの中、(5)、(6)、(11)、(12)は生活のための歌であり、(4)、(9)は、第2夜のシンギングフォークダンスの歌である。

## 2. 第二夜 フォークダンスと屋外ゲームの夕

場所 海辺（水銀灯の照明あり）

プログラム

- (1) ピンポンパン体操
- (2) フリックナーデスモー（FD）
- (3) キンダーポルカ（FD）
- (4) ジャンケンゲーム
- (5) バランスずもう
- (6) トロール船（ゲーム）
- (7) 海の一日（FD）

フォークダンスは簡単なもの、シンギングフォークダンスをとりあげる。

## 3. 第三夜 スタッツの夕

場所 屋内

体型 班別一重円

この夜は班別対抗のスタッツ大会を行なう。スタッツの間に簡単なゲームを挿入する。5分の持ち時間の中に教師が驚くようなスタッツを発表する班もある。班員一同協力して何かを創造する喜びを充分味わったようである。3位までの入賞班には、賞品として西瓜を与えた。

## 4. 第四夜 お別れパーティ

場所 屋内

体型 一重円

プログラム

- (1) 野間の海に（歌）
- (2) 友情の灯入場
- (3) 点火
- (4) 臨海学校長の言葉
- (5) 生徒代表誓いの言葉
- (6) さあさ一緒に歌いましょう
- (7) ペンとひきやヒュー
- (8) ホイマシペーター
- (9) はいそれまで
- (10) チェッコリ
- (11) プクプク先生
- (12) お寺の和尚さん
- (13) 臨海学校は楽しいな
- (14) 座頭市剣法
- (15) 表彰
- (16) 赤とんぼ（歌）
- (17) 月の砂漠（歌）
- (18) 生徒代表感謝の言葉
- (19) シャロム（歌）

} 歌

} ゲーム

} クラス対抗ゲーム

この夜のプログラムはローソクの光を使った静かなセレモニーの部分と、クラス対抗ゲームの動の部分とで成りっている。最後の一夜としての楽しい思い出と厳粛さを目標としている。

この他にレクリエーションとして、3日目午前、水泳訓練の休憩時間に班対抗の砂の芸術コンクールを行なう。生徒は前日から相談して、20分の持ち時間内に協力して作品を作る。入賞して賞品の西瓜をもらった班の生徒の喜びは格別のようなものである。

## おわりに

臨海終了後生徒・父兄より感想文をとっておるが、生徒は500m完泳とレクリエーションの楽しさを中心に、父兄は以上の他、集団生活の羨の面に好感をもっており、学校側の十分な配慮に感謝していることがわかる。今後の問題は経費面（本年4800円）の増加（毎年200円増）と海水の汚染の問題で義務教育段階の学校行事としてどこに限界をおくのか検討を要することである。